

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

サンパウロ州内陸フロンティアにおける農業 小生産者の成立過程：プレジデンテプルデ ンテ市周辺部の「ムラ」を例にとって

西川，大二郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

75

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

1990-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004551>

サンパウロ州内陸フロンティアにおける 農業小生産者の成立過程

— プレジデンテプルデンテ市周辺部の「ムラ」を例にとって —

西 川 大二郎

- [I] まえがき—問題の所在—
- [II] 調査地点の決定
 - (1) 調査地点選定の視点
 - (2) 調査地点の位置づけ(1)
 - (3) 調査地点の位置づけ(2)
- [III] 「ミネのムラ」の形成過程
 - (1) 年齢別・男女別・二世別人口構成
 - (2) 世帯主の着伯から「ミネのムラ」定着までの空間的足跡
 - (3) 世帯主の着伯から「ミネのムラ」定着までの階層的足跡
 - (a) サンパウロ州の農業階層区分
 - (b) 「ミネのムラ」構成員の階層移動状況
- [IV] 小生産者集団地「ミネのムラ」形成の諸条件の歴史的的分析
—自作農への道—
 - (1) 初期日本移民期 (①の時期1913~24年)
 - (2) 国策移民の開始から世界恐慌まで (②の時期1924~29年)
 - (3) 世界恐慌から第二次世界大戦まで (③の時期1929~39年)
 - (a) コーヒー価格の下落
 - (b) コーヒー・ファゼンダの解体
 - (c) 綿花生産の興隆
 - (d) 綿花生産と流通機構
 - (e) 小さな結び
 - (4) 第二次世界大戦期 (④の時期1939~45年)
 - (a) この時期の全般的状況
 - (b) ハッカと養蚕のブーム
 - (5) 第二次世界大戦後 (⑤の時期1945年以降)
 - (a) 自作農化へ (シチアンテへの収斂)
 - (b) 商業へ進出した一部の農業者の限界

〔Ⅰ〕 まえがき—問題の所在—

この報告は、筆者がこれまで行ってきたブラジルの社会経済的地域構造を農業の地域構造的側面から接近する研究の一環をなすものである^{1)~6)}。

ところで、ブラジルの農業構造の特性は、土地制度的視点からみれば、他のラテンアメリカ諸国と同様に、その本質は植民地時代の植民地的土地制度に規定され、大土地所有の対極に零細農が対置されるラティフンディオ—ミニフンディオ構造として特性づけられている。しかしながら、海外市場を指向して特化された商品生産によって発展してきたブラジルの農業は、海外とのエンクレーヴの関係の中で、商品生産の種類によって地域の特化現象を示してきた。そして、それらの商品生産は海外市場の変動に左右されて盛衰がもたらされ、それが地域的に特化された農業生産を媒介としてブラジルの地域構造を特徴づけることとなる。

第二次世界大戦後の1950年センサスを見ても明らかなように、16世紀以来砂糖きび生産に特化してきたノルデステのベルナンブコ州に比べると、19世紀以来コーヒー生産に特化したサンパウロ州では、農業経営体は、規模別にみると10ヘクタール層が薄く、10~100および100~1,000ヘクタール層が厚い。つまり中間層の肥大化という特性を示している。(第1表)

第1表 サンパウロ州とベルナンブコ州の経営規模別農場数、農地面積、耕地化率(1960年)

経営規模別階層	農 場 数			農 地 面 積			耕 地 化 率		
	サンパウロ州	ベルナンブコ州	全 国	サンパウロ州	ベルナンブコ州	全 国	サンパウロ州	ベルナンブコ州	全 国
10ha.>	45.8%	76.6%	44.8%	3.8%	9.4%	2.2%	86.0%	71.3%	66.9%
10-100ha.	43.8	19.5	44.6	22.8	24.3	18.0	39.9	27.0	27.9
100-1000ha.	9.5	3.7	9.4	40.6	43.3	32.5	20.8	20.5	10.5
1000-10000ha.	0.8	0.2	0.9	26.8	17.8	27.4	12.2	9.6	4.1
10000ha.<	0.0	0.0	0.1	5.9	5.2	19.9	11.4	1.1	0.9
不明	0.1	0.1	0.2	—	—	—	—	—	—
計(比率%)	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	24.8%	23.9%	11.2%
計(実数1000ha)	318,841	261,199	3,349,484	20,055	6,280	265,451			

このような地域的農業構造の差異の原因は、カイオ・ブラード・ジュニオールによって、サンパウロ州におけるペケーナ・プロプリエダージ *pequena propriedade* (小土地所有) の成立によるものと指摘されている⁷⁾。

ブラードによるペケーナ・プロプリエダージの規定は、次のようなものである。

「ペケーナ・プロプリエダージを絶対的な数量で規定することは困難である。それは、ブラジルのように一国内で地域的に人口密度や経済密度の差異が余りにも違い過っている国においては一般的なことである。しかしながら、土地所有の種類の特性に関心をもつ場合には、農業開発の経済的、とりわけ社会的性格を知るための思考に効果的に役立つ指標を設定しなければ、その地域で適切なものとはならない。この意味でいえば、グランジ・プロプリエダージ *grande propriedade* (大土地所有大経営) は、奴隷あるいは賃労働者といった労働者を大量に使役する大規模開発であり、そこでは土地所有者と労働者とのあいだに判然とした区別が存在している。それに対して、ペケーナ・プロプリエダージは、僅かな補助労働力に頼りながら、土地所有者とその家族自身が生産労働に参加するものをいう。私は、この意味でこの用語を用いている。」と⁸⁾。その点から考えれば、ペケーナ・プロプリエダージには「小土地所有小生産者」ないし「自作農」という訳語を充当することができよう。さらにいえば、サンパウロ州では、これに相当するものとしてシチアンテ *sitiante* という呼称がある。以下、ペケーナ・プロプリエダージを小土地所有小生産者と呼び、また、その意味を込めて「小生産」、「小生産者」ないしシチアンテと略称する。

ブラードは、このような小土地所有小生産者の成立の条件として、(1)政府による植民開拓、(2)民間による植民開拓、(3)大土地所有地の近接地における労働力引き止めのため、(4)フェゼンダ (大土地所有地) の解体、(5)中心都市の消費の増大という五つを挙げている⁹⁾。

小土地所有小生産者の成立が重要な意味を持つのは、それがブラジルの資本主義の発展に関わるからであり、とりわけ、それがサンパウロ州およびその周辺部に広範に現われたものとなれば、小土地所有小生産者の分析は、サンパウロ経済圏における農業の地域構造分析にとっても重要な意味を持つものとなる。その点で、本研究は、小土地所有小生産者の成立の過程、さらに、小土地所有小生産者の性格およびかれらが形成した地域社会の性格を明らかにすることを目的とする。

以上の目的に沿って、1960年2月に約3週間にわたって、サンパウロ州アル

タソロカバーナのある農業生産者の集団地を採り上げ、その生産の諸関係を中心に据え、生産の諸条件を歴史的かつ空間的に追求する実態調査を行なった。公的統計資料が整備されていない途上国においては、社会経済地域構造の分析を進めるにあたって、統計の操作による方法は明らかに多くの困難と限界がある。それを補完する意味でも、またそれ自身としても、一地域集団を対象としたインテンシブな実態調査は、十分に有効性があると考えている。したがって、この調査報告は、一地域の实態調査の有効性と限界を確認するための試みでもある。

- 1) 西川大二郎「ブラジル、サンパウロ州の農業とその発展過程」西川大二郎 編著『ラテンアメリカの農業構造』アジア経済研究所, 1974年, pp. 183-223。
- 2) 西川大二郎『ドウラードスにおける日本人集団入植地の社会経済的研究』国際移住研究会, 1960年, 47 p.。
- 3) Nishikawa, Daijiro: Aspectos Sócio-econômicos da Produção e Circulação de Produtos Agrícolas de Mato Grosso, Revista Sociologia, vol. XXII, São Paulo, 1960, pp. 129-154.
- 4) 西川大二郎「ブラジル、サンパウロ州の近郊農業の地域的展開」『経済地理学年報』第14巻, 第1号, 1968年, pp. 23-54。
- 5) 西川大二郎「サンパウロ西部の雑作地帯の形成と流通の諸問題—アルタ・ソロカバナ地方, プレジデンテ・ブルデンテ近郊を例にとりて—」アジア経済研究所, ラテンアメリカ研究委員会資料 no. 1, 1962年, 44 p.。
- 6) 西川大二郎「ブラジルの農業政策とその展開」石井章編『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』アジア経済研究所, 1983年, 1月, pp. 219-262。
- 7) Prado Junior, Caio: História econômica do Brasil, 8a. ed., 1963, pp. 254-261.
- 8) *ibid.*, p. 254.
- 9) *ibid.*, pp. 256-257.

【Ⅱ】 調査地点の決定

(1) 調査地点選定の視点

上述のような問題設定から、今回、サンパウロ州西部、ソロカバナ地方プレジデンテブルデンテ Presidente Prudente 市（以下ブルデンテ市と略称する）近傍の地域集団を実態調査の対象地点に決定した。それは次のような理由による。

筆者は、1959年10月から11月にかけて、より内陸のマットグロッソ州南部のドウラードスの国際植民地に、第二次世界大戦後初めて日本から直接集団入植

した日本人集団入植地の調査を行なった¹⁾。この植民地は、開拓前線の拡大に伴って1950年代にブラジル連邦政府によって計画・実施されたものであり、日本人入植者は、多くのブラジル人入植者（当時のブラジル北東部の大干害の影響もあってノルデスチーノが多かった）に混じって、その一部に、日本から直接に集団入植したものであった。ここにも多くの小生産者の成立を見たが、これは、前記のブラードの説明によれば、(1)政府による植民開拓に由来するものといえよう。調査時は、入植後7年目であり、入植後いまだ多くの時を経ていなかったもので、十分な方向づけなされたとはいえないが、それでも、入植者個々の定着が進行する中で、流通・加工過程を通じて商業・加工資本の蓄積が進み、それらを通じて、開拓地の流通の結節点となった都市に居住する「地主的商人層」の成立が見られるようになった。

この調査の結果、マットグロッソ州南部の開拓地農業は、サンパウロ州における農業フロンティアの拡大という生産地の空間的拡大の延長上にあることが判明しただけでなく、マットグロッソ州南部への内陸入植開拓は、決して内陸部における自給農業の拡大という形をとらず、コーヒー生産を媒介とした商品生産の発展という形をとることが判明した。その結果、サンパウロ州および、マットグロッソ州南部を含むサンパウロ州周辺部の農業の特性の把握のためには、商品生産農業の分析という視点は欠かすことができないという結論に達した。マットグロッソ州南部の農業は、商品市場を媒介として隣接するサンパウロ州西部地域（例えばアルタソロカバーナ）の生産地と競争関係にあり、それらは共に、サンパウロ市場、さらには海外市場と強く結びついている。

これらの関係は、すくなくとも二つの側面において考えるべきであろう。

一つは、サンパウロ西部地域を、マットグロッソ南部生産地とサンパウロ市場との流通の中間的結節点として考慮することである。そして、他の一つは、具体的農業生産者がサンパウロ市場の拡大に伴って外延的に生産地を移動し拡大し、1950年代にマットグロッソ南部にまで達した、その中間点として考慮することである。

この視点からすると、1920年代以降の西部開拓前線であったサンパウロ州西部の一部であるアルタソロカバーナは、1950年代の開拓前線であるマットグロッソ州南部とサンパウロ市およびサンパウロ市近郊との中間的結節点にあたるのが予測される。したがって、ここにおける農業小生産の生産と流通の実態調査は、新旧フロンティアの比較という点から、またそれらの関係という点からも、さらにサンパウロ州のフロンティアの構造把握のためにも意味のあるこ

とと考えられる。

それと同時に、サンパウロ州西部内陸部の開拓農民は、日本移民を含めて、19世紀以降の多くの外国移民によって構成されてきた。それらの開拓農民は、始めから集団開拓地に入植した場合でさえ、その多くがブラジルにおける農業生産の諸条件の中で、土地を資産として考えるよりも、経済的生産手段と意識し、一定の土地に固着することなく、より高い生産性を求めて、移動するのが一般的であった。しかし、結果として、小土地所有小生産者に転化した場合には、出身地（国）の伝統的農村の性格をひきずりながら、再び集団化を遂げる。その集団化現象の分析は、多くの外国移民によって構成されたサンパウロ州の社会的性格を理解する上で興味あることである。

このような視点から、調査地点として、プルデンテ市中心から10キロメートル圏内にある、農業小生産者が集団した任意の地域を選んだ。そして、調査地点として決定したこの集団地を「ミネのムラ」と呼称することにする。

「ミネ」は「嶺」のことであり、分水嶺を意味している。分水嶺とはいっても、日本の切り立った山地の分水嶺を想像してはならない。サンパウロ州は、全体として西に向かって高度を低めていく高原から成り、西に向かってほぼ平行して流れる数本の主要な河川がある。道路や鉄道は、これらの河川の分水嶺に沿って建設され、集落も、多くはそこに形成されている。例えば、アルタソロカバーナは、ペイシェ川 Rio Peixe とパラナパネマ川 Rio Parapanema を分つ分水嶺をなす高原状の土地である。したがって、高原上の集落は「ミネ」の集落として一般化することができる。

(2) 調査地点の位置づけ(1)

「ミネのムラ」は、ファゼンダに隣接し、もとファゼンダの鉄道の一停車場を中心に数十の農業生産者が集っている集落である。プルデンテ市近傍には、アルタソロカバーナ地方に一般にみられるように農業小生産者が多い。そして、その大部分が二次的集団化を遂げたものである。したがって、その限りで、任意の集団地を選ぶことは、特殊な事例を追求することにはならないと判断できる。

このような判断を下すもう一つ根拠は、セルジオ・ミリエ『コーヒーの開拓誌⁸⁾』である。ミリエは、コーヒー生産の地域的変遷と発展を把握するため、農業生産と経済人口に関わる諸指標を統計的に処理し、その結果からサンパウロ州を次のように地域区分した⁹⁾。

(1)北部。州の北部海岸地域およびパラナイーバ川沿岸を含む。1830～50年代に最盛期を迎えた古いコーヒー地帯。(2)セントラル。州都サンパウロおよびカンピーナス、ピランカーバ等を含む地域で、コーヒー生産は1830年代に始まり1880年代に最盛期を迎え、北部に次ぐ古いコーヒー地域。(3)モジアナ。カンピーナスから始まるモジアナ鉄道の沿線地域で、いわゆるテラロッシュャ地帯を含み、コーヒー生産は1830年代に始まり、1880～1920年代に最盛期を迎える。モジミリン、リベイランプレットを含む。(4)パウリスタ。パウリスタ鉄道沿線（後のパウリスタ延長線を除く）に始まり、アララクアラ線沿線の一部を含む。コーヒー生産は1850年代に始まり、1880年代に最盛期を迎える。北の部分は砂質土で、コーヒー生産に適さない。リメイラ、リオクラルコ、サンカルロス、アララクアラ、オリンピア、バレットスを含む。(5)アララクアレンセ。アララクアラ延長線の沿線地域で、主に1880年代以降に開拓が進む。コーヒー生産は1920～30年代に最盛期を迎える。マタン、サンジョゼドリオプレットを含む。(6)ノロエステ。パウルーから始まるノロエステ鉄道およびパウリスタ延長線沿線地域で、主に1910年代以降の開発地。コーヒー生産の最盛期は1930年代以降。パウルー、カフェランジア、アラサツバ、マリリアを含む。(7)ソロカバーナ。ポツカツーから始まるソロカバーナ延長線の沿線地域で、主に1910年代以降の開発地。コーヒー生産の最盛期は1930年代以降。ただし、砂質土地帯が多い。ポツカツー、オウリーニョス、プレジデントプルデンテを含む。

ミリエの地域区分は、サンパウロ州に限られているが、それに北パラナを加えると、第二次世界大戦前のサンパウロ州とその周辺部のコーヒー生産地の地域区分は完成する。(8)北パラナは、オウリーニョスから分岐した北パラナ鉄道沿線のテラロッシュャ地帯を含む地域。主に1930年代以降にコーヒー生産で開発が進み、第二次世界大戦後、1960年代には、コーヒー生産でサンパウロ州を凌駕した。

「ミネのムラ」は、この地域区分における(7)ソロカバーナに属し、さらにその中でも、1920年代以降に開発が進んだ内陸部分のアルタソロカバーナに属する。そして、そこでは、ミリエが用いた1936年の統計によれば、外国移民の構成率は20パーセントを超えていた⁴⁾。

また、ここは主に日系の農業生産者の集団地である。この点についても、アルタソロカバーナの一般性を考えれば、大きい問題は無いと判断した。アルタソロカバーナには、一般に日系人が多い。そして、とりわけ農業小生産者は日系人によって占められている。したがって、この地域で、特に小生産者の成立

過程を分析しようとする場合には、日系農業小生産者を中心に調査を進めることができると判断した。アルタソロカバーナの中心地の一つであり、「ミネのムラ」が属するブルデンテ郡を採って、その構成比を試算すると、1960年には日系人人口は総人口の12パーセント弱に達している⁸⁾。

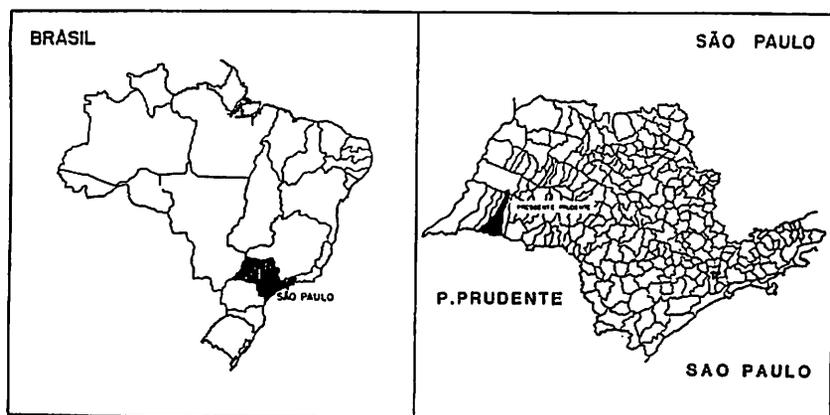
(3) 調査地点の位置づけ(2)

調査地点の「ミネのムラ」は、アルタソロカバーナ地方の中心都市ブルデンテ市の中心から約10キロメートルのところにある。そして、行政的には、この集落の主要部分はブルデンテ市(郡) Município de Presidente Prudente に属し、一部はそれに隣接する他郡に属し、集落地全体とすれば、二つの行政体にまたがっている。

この集落の主要部分が属するブルデンテ郡に例を採って、この地域の状況を示す。

ブルデンテ郡は、サンパウロ市から西方に延びる鉄道ソロカバーナ線に沿って614キロメートルの地点にあるアルタソロカバーナ地方の中心都市ブルデンテ市を含む郡である。(第1図)

この都市を含む郡の設立は、郡役場の記録によると、1917年フランシスコ・デ・パウラ・ゴウラル大佐 Coronel Francisco de Paula Goulart によるものであるとされている。その時点では、ソロカバーナ鉄道は、約20キロメー



第1図 プレジデンテブルデンテ郡の位置 (1945)

トル手前のインジャーナまでしか達していなかった。ソロカバーナ鉄道がこの都市に到達したのは1919年のことである。このような新しい開拓都市であるから、人口の増加にしたがって、行政的範囲は時とともに大幅に変更されてきた。入手された統計資料によると、面積が、1940年センサスでは 3,616 km²、1945年センサスでは 2,317 km²、1956年の郡統計では約 800 km² と変遷している。したがって、これらの統計による時系列的比較は、極めて困難である。人口数をとってみても、1940年には75,806人（市街地 17,927 人）、1945年には7万2千人弱であったのが、1956年には69,171人、1960年には、71,690人（市街地 56,000人）と余り変らない。市街地人口の増大が人口の成長を示しているにもかかわらず、総人口の絶対数が余り変らないのは、行政領域の縮小によるものであることは明らかである。

1945年の比較的整った統計と、郡役場において作成してもらった資料（1956年～59年）によって、その当時の状況を略記しよう。

面積と人口は既に触れた。

位置は、南緯22度07分、高度 472メートルで、ほぼ南回帰線下の高原上の土地である。州都サンパウロ市からの距離は、直線距離で 520キロメートル、ソロカバーナ鉄道によると739キロメートル、国道沿いでは590キロメートルである。これを時間距離にすると、鉄道では一昼夜（急行で17時間、貨物輸送は20時間以上）となり、国道沿いのトラック輸送によると10～13時間の距離となる。定期航空路もある。

1945年統計によれば、郡内の土地は、その約半分がマツト（森林）であり、約4分の1が耕地であり、残りが牧地その他となっている。その耕地約7万2千ヘクタールのうち、80パーセント強が短期作物 *culutivo temporário* 用のものであり、永年作物 *culutivo permanente* 用は、全体の20パーセント足らずに過ぎない。主要産業は農牧業と記され、主産物は、コーヒー、ワタ、アモンドイン（落花生）、バタータ（馬鈴薯）、米、とうもろこし、フェイジョン豆の外、牛などの畜産物とある。しかし、永年作物はコーヒーのような樹木作物を意味するから、この地域の農業は、日系人が「雑作」と呼ぶ、コーヒー以外の作物に重点が置かれていることが解る。それと同時に、中心都市には、綿綿、搾油、精油、コーヒーの精選工業、精米、清涼飲料製造等々これらの農産物加工業ないし食品工業が存在する。これらの産業は内陸の中都市に一般に見られるものである。

農業経営体数は1,512で、その内50アルケイレ（約121ヘクタール）以下のもの

のが1,310, それ以上のものが202となっている。かつてはファゼンダと呼ばれた大農場, 大牧場によって分割されていたこの地域も, 土地の分割が進み, 50アルケイレ以上のもの202の中で, 今でも, ファゼンダと呼ばれているものは, 郡役所の記録によると40となっている。その各々の面積規模は公簿で知ることにはできなかった。しかし, 調査地点に関わるものとして, モンテアルト Faz. Monte Alto, アヴィアサン Faz. Aviação, マンダグアリ Faz. Mandaguari, カンパメント Faz. Campamento 等の名前がその資料に記録されていた。

以上のような一般的状況の中にあつて, 小生産者の形成過程を追跡する, それも計画的植民地でないという意味で自然発生的な小生産者の集団地を追跡する調査地点を選ぶとすれば, ファゼンダの周辺部に形成された小生産者の集団地を選ぶことになる。「ミネのムラ」は, ブルデンテ市から10キロメートルほどの地点にあり, 街に居住しながら頻繁に訪問することも可能な距離にあり, かつまた, 前記のモンテアルト, アヴィアサン, マンダグアリといったファゼンダに接しているという点で好個の地点と考えられた。

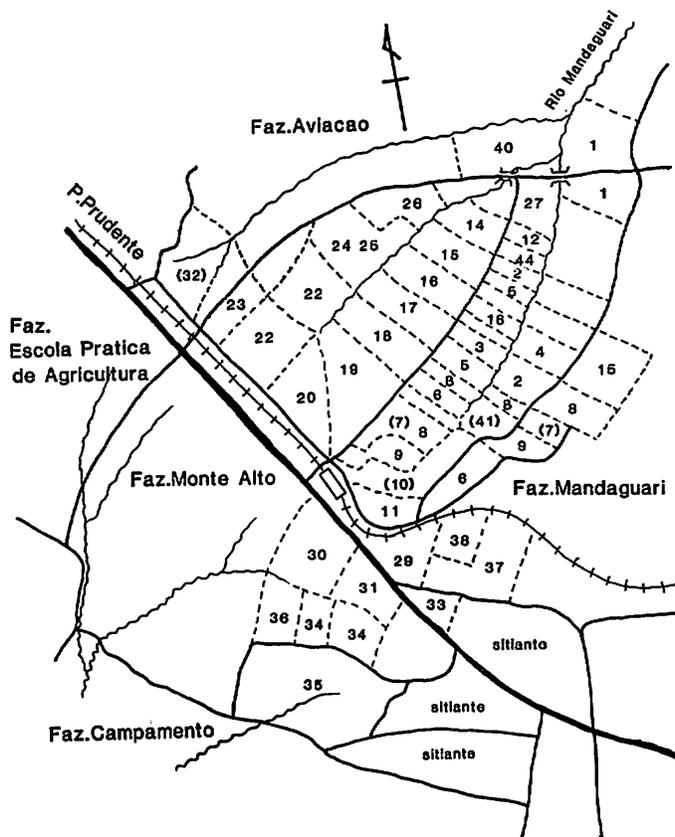
- 1) 西川大二郎『ドウラードスにおける日本人集団入植地の社会経済的研究』国際移住研究会, 1960年。
- 2) Milliet, Sérgio: Roteiro do café, 1946, São Paulo. 『コーヒーの開拓誌』
- 3) *ibid.*, pp. 10-12.
- 4) *ibid.*, pp. 119-120.
- 5) 1960年のブルデンテ市の日系人の構成比を示す。

P. Prudente 市	
総人口	60,903 人 (100.0%)
日系人口	7,020 人 (11.5%)
市街地人口	26,790 人 (100.0%)
内日系人口	4,300 人 (16.1%)
農村人口	34,113 人 (100.0%)
内日系人口	2,720 人 (8.0%)

資料: IBGE: Anuário Estatístico do Brasil, 1963. および Comissão de Recenseamento da Colônia Japonêsa: The Japanese Immigrant in Brazil, The University of Tokyo Press, 1964.

〔Ⅲ〕 「ミネのムラ」の形成過程

行政的にまとまったものでもなく, 公的な個別資料もない土地で, 集団地の実態調査を進めるためには, 基礎的資料として, 概略的なものであつても, ま



第2図 「ミネのムラ」略図(番号は世帯番号)

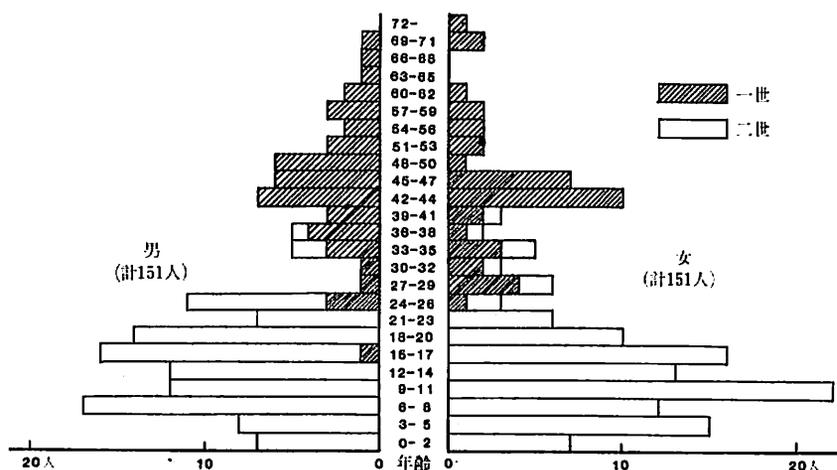
ず、その土地の地図を作ること、そして、調査対象の個表を作成することが最低必要なこととなる。したがって、まず概略図を作成し、かつ、この地域に居住する約50世帯の内、不完全なものではあるが、41世帯の個表を作成した。

(第2図)

(1) 年齢別・男女別・一二世別人口構成

年齢別・男女別・一二世別人口構成は第3図のとおりである。(第3図)

調査対象となった集団地の人口総数は302名。



第3図 「ミネのムラ」の年齢別人口ピラミッド (1960年2月現在)

年齢構成からすると、男は27歳～32歳に大きなくびれが見られ、女は24歳～26歳に幾分のくびれが見られる。

これに一二世別の要素を入れる。一世の人口数は87名で全体に対する割合は29パーセント、二世の数は215名で、全体に対する割合は71パーセントである。したがって、数の割合だけで見ると、二世の割合は圧倒的に多い。しかし、二世は若年層に多く、その境界は人口年齢ピラミッドのくびれの線にある。このことは、一定の年齢に達した一世の世帯主が家族とともにこの土地に入植したことを示し、二世人口の増加はその後のことと考えられる。したがって、世帯主を一二世別に見ると、40世帯中、二世が世帯主であるものは、僅かに3世帯に過ぎ、それも一世である両親のいずれかが生存していて世帯員を構成している。したがって、この集団の実権は、全体として一世にあるといえよう。

世帯主を中心にして、出生年で整理してみると、次のとおりである。(第2表)

総世帯の内、最も高齢の者は、1879年生れであり、最も若い者は1929年生れである。高齢の1879～98年生れの者5名は、既に実質的な世帯主は、息子の代となっている。この5名を除き、それに代えて実質的世帯を算入し、世帯主を出生年代別に整理すると、40世帯中、明治(1899～1912年)生れは16名、大正(1912～26年)生れは22名で、昭和生れは、僅かに2名に過ぎない。ただし、か

第2表 「ミネのムラ」
世帯主年齢別（1960年）

世帯番号	世帯主出生年
*14	1879年
*3	1885年
*10	1890年
*28	1892年
*31	1894年
*27	1898年
12	1899年
39	1900年
4	1901年
38	1901年
13	1903年
11	1904年
5	1907年
6	1907年
32	1907年
23	1910年
15	1911年
19	1911年
25	1911年
33	1911年
10	1912年
16	1912年
2	1913年
26	1914年
35	1914年
9	1915年
40	1915年
21	1916年
22	1916年
29	1916年
31	1916年
34	1916年
30	1918年
18	1919年
7	1920年
24	1921年
14	1922年
28	1922年
3	1923年
20	1923年
1	1924年
16	1924年
9	1926年
27	1926年
37	1928年
17	1929年

*は、実質の戸主は、阿番号の赤字に移る。

第3表 「ミネのムラ」構成員
着伯年次別および着伯後の
移動年数（1960年）

世帯番号	着伯年	ミネ定着年	移動年数
12	1913年	1938年	25年
14	1913	1949	36
27	1918	1948	30
33	1918	1951	33
18	1918	1948	30
15	1925	1946	21
19	1925	1937	12
23	1925	1938	13
40	1925	1959	34
5	1928	1950	22
13	1928	1938	10
7	1929	1937	9
16	1929	1946	17
21	1929	1951	22
24	1929	1948	19
25	1929	1947	18
34	1929	1947	18
36	1929	1953	24
29	1930	1953	23
4	1932	1951	19
35	1932	1948	16
3	1933	1940	7
9	1933	1939	6
10	1933	1941	8
30	1933	1940	7
31	1933	1938	5
1	1934	1939	5
2	1934	1949	15
6	1934	1952	18
8	1934	1941	7
11	1934	1941	7
17	1934	1945	11
22	1934	1945	11
28	1934	1939	15
31	1934	1937	3
37	1934	1944	10
26	1936	1956	20
32	1936	1956	20
38	1936	1947	11
20	1937	1945	8
39	1937	1954	17

れらは、ブラジルに渡航してきた時から世帯主であったわけではない。というよりも、その中には、渡航時には、両親にしたがって、または、他の家族の構成員として独身で渡航し、その後、結婚し独立したものが多い。

(2) 世帯主の着伯から「ミネのムラ」定着までの空間的足跡

ここで、かれらが渡伯して以来、「ミネのムラ」に定着するまでの足跡を追ってみる。このことは、ブラジルへの農業移住者の足跡の一般的傾向を知りうえて参考になると考えられるので、この時点での世帯主の足跡だけに止めず、

両親に同行してきた場合には、知れる限りで両親の足跡をも追ってみる。

そこで、まず、調査世帯主を着伯年で整理し、それに「ミネのムラ」定着年を考慮することによって着伯以後の移動年数を明らかにする。さらに、この期間中のかれら空間的移動を訪ねる。また、「ミネのムラ」の構成員は、大小の差はあってもそのほとんどが農地所有者になっているから、それに加えて小生産者に至るまでの階層的移動を追う。

第3表は、「ミネのムラ」構成員を着伯年次順に整理し、それに「ミネのムラ」定着年を加え、それによって着伯後の移動年数を算出したものである。(第3表)

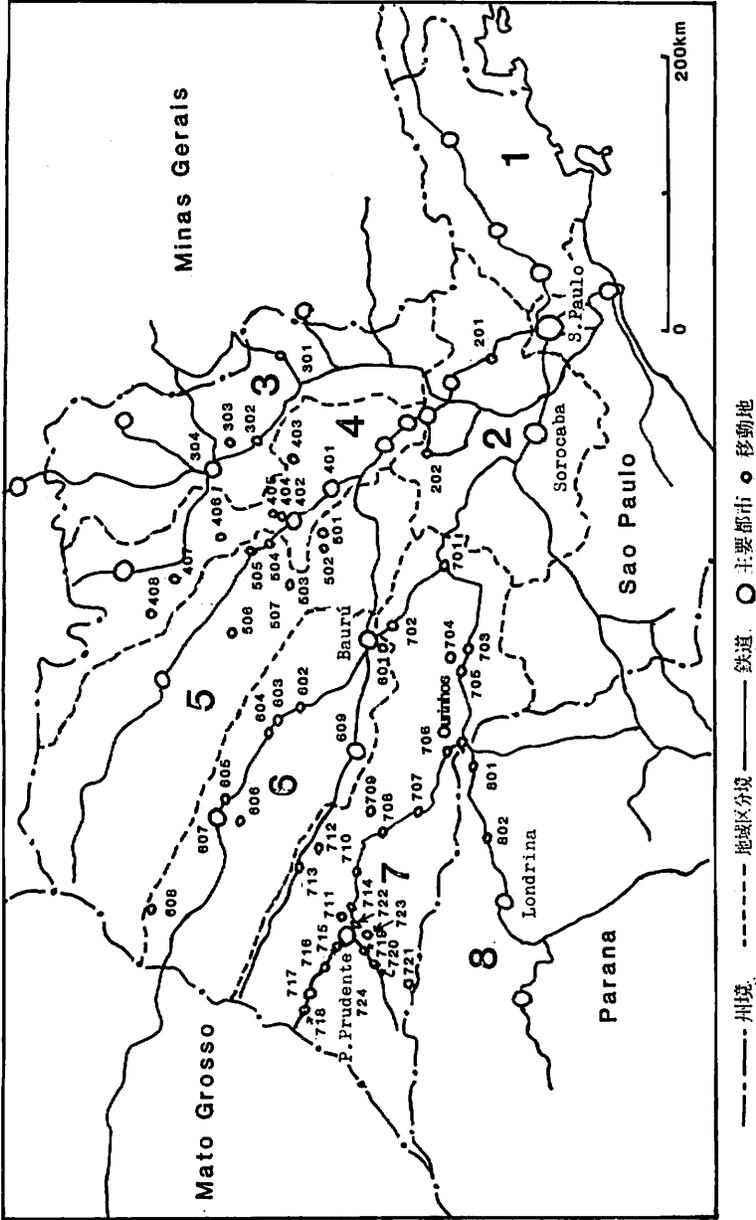
まず、着伯年を見ると、最も古い者は1913年であり、最も新しい者は1937年である。しかし、41例中35例までが1925年以降である、これは、ブラジルへの日本移民の一般的傾向と一致する。ブラジル政府は、第二次世界大戦中のヨーロッパ移民の減少から日本移民に対してブラジル州政府の渡航費補助などの優遇政策を採っていたが、それが1924年に打ち切られた。それに代って、同年、日本政府が渡航費の全額負担など積極的移民促進政策に切り代えた。これ以後、日本移民は急増した。日本の国策移民としての色彩を強め「皇国移民」とも呼ばれたのが、この時期の移民である。そして、その数年後に発生した世界恐慌の嵐に巻込まれたのも、この時期の移民である。

着伯後、「ミネのムラ」に定着するまでの期間は、長い者は36年、世界恐慌の1929年までの渡航者例だけで見ると、平均22年弱となり、移動が激しい。

この期間の動向を空間的側面から追跡したものを、第4表に示す。また、その位置を示すために、第4表に照応する第4図を用意した。この地図のベースマップは、1988年現在の地図を用いている。したがって、自動車道路網の整備によって、かつて開拓期に建設され、その後廃止された鉄道路線は含まれていない。1～8までに区分した地域区分は、前出のミリエの『コーヒーの開拓誌』によった。これは、サンパウロ州の開拓の地域的発展を跡づけるものであるからである。そして、これに北パラナを加えた。区分した地域名とその番号は、1.北部、2.セントラル、3.モジアナ、4.パウリスタ、5.アララクアレンセ、6.ノロエステ、7.ソロカバーナ、8.北パラナである。各地点番号に照応する移動地の地名は別表に示す。(第4表・第4図・同表同図の付表)

これらの表および図から知れることは、次のようなことである。

まず、1924～25年頃までの、つまり日本移民が「国策移民」化するまでの移民の初めの入植地は、200番、300番台が多い。ここは旧コーヒー地帯であり、



第4図 「ミネのムラ」構成員の空間的移動地図

第4表および第4図の付表 図表中の番号と地名の照合表

地域名	番号	「ミネのムラ」構成員の移動地の地名
1 北部 Norte	なし	
2 セントラル Central	2 0 1 2 0 2	ジュンジャイ Jundiá ピラシカーバ Piracicaba
3 モジアナ Mojiana	3 0 1 3 0 2 3 0 3 3 0 4	モジアナで特定せず サンシマン São Simão セラアズール Serra Azul リベイランプレット Ribeirão Preto
4 パウリスタ Paulista	4 0 1 4 0 2 4 0 3 4 0 4 4 0 5 4 0 6 4 0 7 4 0 8	サンカルロス São Carlos アララクアラ Araraquara グアタバラ Guatapura アメリカブラジリエンセ Américo Brasiliense サンタルシア Santa Lucia ジャボチカバル Jaboticabal モンテアズールパウリスタ Monte Azul Paulista オリンピア Olímpia
5 アララクアレンセ Araraquarense	5 0 1 5 0 2 5 0 3 5 0 4 5 0 5 5 0 6 5 0 7	グアラピランガ Guarapiranga ボアエスヘランサドスール Boa Esperança do Sul タバチンガ Tabatinga マタン Matão サンタエルネスチーナ Santa Ernestina イタジヨビ Itajobi カンブイ Cambuí (不明)
6 ノロエステ Noroeste	6 0 1 6 0 2 6 0 3 6 0 4 6 0 5 6 0 6 6 0 7 6 0 8 6 0 9	ピラチニング Piratininga カフエランジア Cafelandia リンズ Lins グアイサーラ Guaiçara ビリグイ Birigui ピラッキ Bilac アラサトゥバ Araçatuba ハレイラバレット Pereira Barneto マリリア Marília
7 ソロカバーナ Sorocabana	7 0 1 7 0 2 7 0 3 7 0 4 7 0 5 7 0 6 7 0 7 7 0 8 7 0 9 7 1 0 7 1 1 7 1 2 7 1 3 7 1 4 7 1 5 7 1 6 7 1 7 7 1 8 7 1 9 7 2 0 7 2 1 7 2 2 7 2 3 7 2 4	ルビアンジュニオール Rubião Junior アグードス Agudos セルケイラセザール Cerqueira César サンタバルバラ Aguas de Santa Bárbara マンドリ Manduri サルトグランデ Salto Grande アシス Assis パラグアスーパウリスタ Paraguaçu Paulista ルテシア Lutécia インジアナ Indiana ランチャリア Rancharia バストス Bastos オズヴェルドクルス Osvaldo Cruz マルチノポリス Martinópolis アルヴェンスマシヤード Alvares Machado セントアナスタシオ Santo Anastácio プレジデンテヴェンセスラウ Presidente Venceslau カイウア Caiua ピラポジーニョ Pirapozinho タラバイ Tarabai パラナバネマ Paramapanema レジェンテフェイジョー Regente Feijó アニューマス Anhumas プレジデンテプルデンテ Presidente Prudente
8 北パラナ Norte do Paraná	8 0 1 8 0 2	カンバラ Cambará コルネリオプロコピオ Cornélio Procopio

いる。

「ミネのムラ」に定着するのは、35例中、1937年から第二次世界大戦終了までのものが9例、残りは、すべて第二次世界大戦後のことである。

(3) 世帯主の着伯から「ミネのムラ」定着までの階層的足跡

(a) サンパウロ州の農業階層区分

「ミネのムラ」構成員世帯主が、着伯後「ミネのムラ」に定着するまでの階層的足跡を追跡するためには、まず、サンパウロ州およびその周辺部に見られる農業者の階層区分が必要である。ここでは、階層順に、カマラーダ *camarada*、コロノ *colono*、コロノコントラチスタ *colono contratista*、フォルネセドール *fornecedor*、メイエイロ *meieiro* (またはパルセイロ *parceiro*)、アレンダタリオ *arrendatário*、シチアンテ *sitiante*、ファゼンデイロ *fazendeiro* を設定した。

カマラーダは、日雇農業労働者のことである。ペオン *peão* と呼ばれる場合もある。食事付き、食事無し、時間給、出来高払い、日雇い、週雇い、常雇い、日給払、月給払等、労働形態や賃金形態が多様であるが、いまはこの差異は問わない。

コロノは、専らコーヒー生産に関わる労働者である。そもそもが、移民導入に当って設定された契約に基づく農業労働の形態である。契約は基本的に家族を単位として行われた。一般に1農年契約で一定本数のコーヒー樹の監理を請負い、樹一本当りの請負賃を受取る、契約時に、住宅の貸与、自給食料生産のための土地、ロサーダ *roçada* (余作地) の貸与等の条件が加えられる。収穫時の契約は別途とする。

コロノコントラチスタは、コロノと同じく基本的に家族を単位として契約を結び、一定本数のコーヒー樹の育成・監理を請負う労働者であるが、コーヒー園造成請負いコロノともいえるもので、一般に、コーヒー樹の新植・育成の際に取結ばれる請負い契約労働である。コーヒー樹が成木となるまでの4～6年の契約が行われる。新植樹の欠株の補植についてはコロノの責任になる。契約時に、ロサーダの貸与ないしコンプランタ *complanta* (間作権=新植樹の間の土地の利用権) についての条件が加えられる。契約期間の永続性、作物についての一定の制限があっても生産物の販売に関しての相対的自主性が保たれ、生産監理や間作地での生産物の販売等について一般コロノより高い自主性を持つ。

フォルネセドールは、原料生産請負い農業者のことで、ここでは、専ら砂糖きび生産に関わる。砂糖きび農場の土地の一部を借り受け、生産物は農場内の加工場に持込み、販売する。

メイエイロは、パルセイロ *parceiro* またはポルセンタージェン *porcencagem* (歩合農または分益農) の一種である。パルセイロは、1年または1作の契約で地主に土地を借り受け、生産物を土地所有者との間で一定の割合で分配し、地代を支払う。メイエイロは、その中で生産物を50:50で折半するものをいう。一般に作物が指定される。種子や農薬や肥料の費用を地主が持つか、生産者が持つかによって、歩合の割合が変わる。生産者に資金が無い場合には、地主から食料日用品等の前貸しを受けることもある。それらの程度によって、生産や経営に関する生産者の従属性と独立性を考慮する必要がある。

アレンダタリオは、借地農のことである。前記のパルセイロのことをも俗にはアレンダタリオと呼ぶこともあるが、ここでは厳密な意味で用いたい。つまり、アレンダタリオとは、一定期間、一般には1年の契約で土地の利用権を得るもので、地代は定額借地料の形態をとり、原則的には現金で支払う。したがって、作物の指定、生産資財・日用品・食料の前貸しを受けることがあっても、アレンダタリオは、パルセイロと比べると、生産体系の自己把握、経営の独立性が遙かに強い。

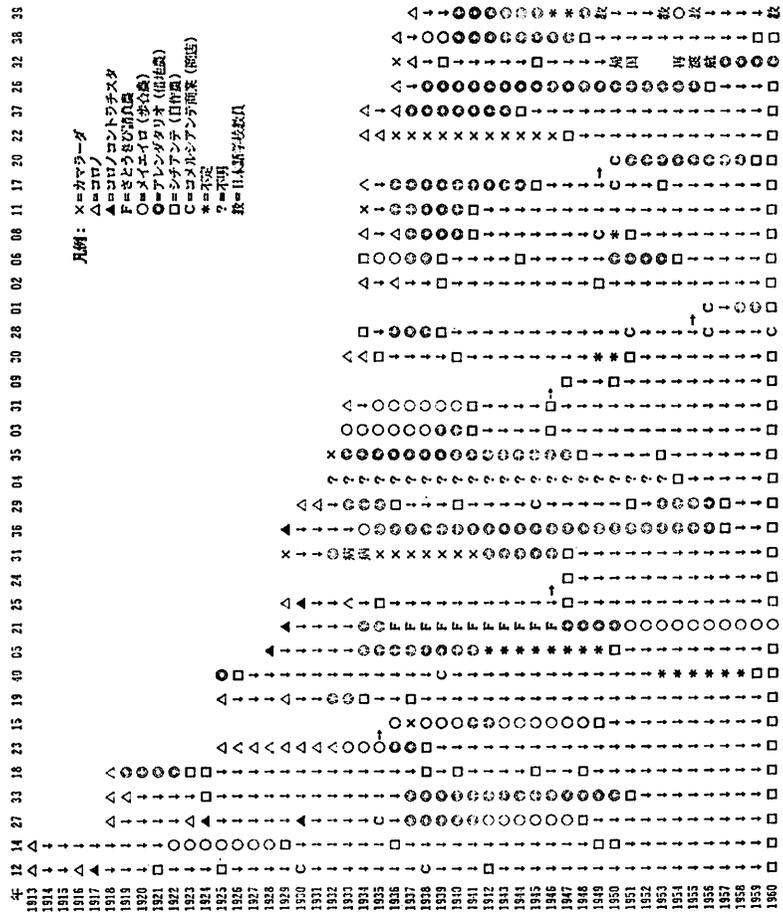
シチアンテは、自作農を指す。既に述べたベケーナ・プロプリエダージがこれに当り、したがって小土地所有小生産者と呼称することもできる。

ファゼンデイロは、ファゼンダの所有者である。ファゼンダには明確な定義はない。そもそもは資産という意味である。19世紀の独立以後、土地の私的所有が公認されるようになって、それまでの分与地制に基づいて取得した大土地所有制下の大農制下の大農場をファゼンダと呼ぶようになった。そのような歴史的経緯を考慮すると、古い身分制度や労働慣習を持ち伝統的社会を形成している大農場に限ってファゼンダと呼ぶべきかもしれない。しかし、現在では、一般には数百アルケイレ以上の大農場、大牧場をいう。

シチアンテとファゼンデイロの差異は、量的であると同時に多分に質的なものである。しかし、ここでは、統計的資料との関係で、量的な特性をもう少し具体的に捉えておく必要があろう。

ミリエは、ブラードが「ベケーナ・プロプリエダージは、土地条件、位置条件、作物の種類、技術的水準等から面積規模で分類できない」という質的な規定を承認した上で、ブラードの規定を継承して、統計的処理の必要からサンバ

第5表 「ミネムラ」構成員の階層移動状況(1960年まで)



註：△↑および▲↑は、同じ農家での変移を示す。□↑も同じ土地での変移を示す。○↑は、分家・独立を示す。
 △→○は、所有地の変更・移転を示す。→は、分家・独立を示す。

tifamily large-sized farms に当る⁹⁾。その中に掲げられている統計からすると、family size farms の規模は、ブラジルでは、平均が17.2ヘクタール(7.1アルケイル)と算出できる⁹⁾。

上記の農業階層分類は、以上の諸論の妥当性を認め、それらを参考にして決定したものである。

(b) 「ミネのムラ」構成員の階層移動状況

上記の階層区分にしたがって、「ミネのムラ」構成員個々の階層移動状況を示した第5表を作成した。(第5表)

第5表は極めて複雑なものであるが、それでも次のことを読取ることができる。

まずいえることは、着伯時には大部分がコロノとして就業していることである。そして、「ミネのムラ」は最終的にシチアンテに収斂した集団であるから当然のことともいえるが、その構成員の大部分が、期間の長い短いの差が見られるとしても、コロノからコロノコントラチスタ→メイエイロ→アレンダタリオ→シチアンテという農業階層上昇の道をたどっている。

この傾向性をもたらした条件を探るために、歴史的視点を導入して整理し、第6表を作成した。(第6表)

この表を分析するのに当って、歴史的契機として、1914年の第二次世界大戦の勃発、1918年の終結、1924年の日本の国策移民政策の開始、1929年の世界恐慌、1939年の第二次世界大戦の勃発および1945年の第二次世界大戦の終結等を考慮し、五つの時期に区分した。

- ① 「ミネのムラ」構成員の内、最も早く着伯した1913年から1924年の日本の国策移民政策の開始まで。
- ② 1924年の日本の国策移民政策の開始から1929年の世界恐慌まで。
- ③ 1929年の世界恐慌から1939年の第二次世界大戦の勃発まで。
- ④ 第二次世界大戦の勃発から終結まで。
- ⑤ 第二次世界大戦終結以後。

上記の時期区分にしたがって、第5・6表を読み取ると、次のようなことが判明する。

①の時期—移住者の着伯時の就業形態であるコロノが主力であり、コロノの形態は持続される。

②の時期—コロノの形態は持続されるが、コロノコントラチスタとシチアンテの形態が、それを凌駕する。

第6表 「ミネのムラ」構成員の階層状況・年別頻度（1960年まで）

年	×	△	▲	F	○	◎	□	C	*	教	計
1913		2									2
1914		2									2
1915		2									2
1916		2									2
1917		1	1								2
1918		4	1								5
1919		3	1			1					5
1920		3	1			1					5
1921		3				1	1				5
1922		2			1	1	1				5
1923		2			1		2				5
1924			1		1		3				5
1925		2	1		1		4				8
1926		2	1		1		4				8
1927		2	1		1		4				8
1928		2	2		1		4				9
1929	1	3	4				5				13
1930	1	3	5				4	1			14
1931	1	3	5				4	1			14
1932		2	5			2	4	1	1		15
1933		3	4		2	3	4	1	2		19
1934	1	8	1		3	4	7	1	3		28
1935	1	5			4	5	8	2	3		28
1936	3	5		1	4	7	8	2	2		32
1937	3	5		1	2	12	7	1	1		32
1938	2	3		1	4	12	8	1	1		32
1939	2	1		1	3	11	11	2	1		32
1940	2			1	2	13	11	2	1		32
1941	2			1		11	15	2	1		32
1942	1			1	1	10	16	1	2		32
1943	1			1	2	9	16	1	2		32
1944				1	2	8	17	1	2		32
1945	1			1	2	7	17	2	2		32
1946	1			1	2	6	17	2	3		32
1947					2	6	21	2	3		34
1948					1	5	24	2	2		34
1949						4	23	3	3	1	34
1950						5	21	4	3	1	34
1951					1	4	24	3	1	1	34
1952					1	4	24	3	1	1	34
1953					1	5	24	1	2	1	34
1954					2	4	26	1	1		34
1955					1	4	26	1	1	1	34
1956					1	3	27	2	1	1	35
1957					1	2	29	2	1	1	36
1958					1	3	29	1	1	1	36
1959					1	2	31	1	1	1	37
1960					1	1	32	2		1	37

日本国策移民開始

世界恐慌

第二次世界大戦開始

第二次世界大戦終了

凡例：
 ×=カマラーダ
 △=コロノ
 ▲=コロノコントラチスタ
 F=さとうきび請負農
 ○=メイエイロ（歩合農）
 ◎=アレンダタリオ（借地農）
 □=シチアンテ（自作農）
 C=コメルシアンテ商業（商店）
 *=不定・不明
 教=日本語学校教員

③の時期—1929年の恐慌を境にして、その後数年は、コロノとコロノコントラチスタの数は維持され、かつ幾分の増加を示すが、コロノコントラチスタは5年後の1934年を、コロノは10年後の1939年を最後として消滅する。コロノの増加は、この時期にコロノ移民として着伯した移民の増加によるものである。

そして、コロノおよびコロノコントラチスタに代って、1932年頃からメイエイロとアレンダタリオが出現し増加を始める。また、この時期には、シチアンテも増加した。小商人層の出現も、この時期の特徴といえよう。

④の時期—第二次世界大戦の勃発を前後して、上記の現象は一層助長された。コロノとコロノコントラチスタは消滅し、アレンダタリオとシチアンテが増加した。

⑤の時期—この調査の対象として小生産者集団地を採り上げたのであるから、当然のことではあるが、最終的には「ムラ」の構成員の大半はシチアンテとなる。しかし、この時期にも、まだ相当数のアレンダタリオが存在し、それが、徐々にシチアンテに移行していつている。

1) Milliet, op. cit., pp. 75-77.

ミリエの規定は下記のとおりである。1 alq. (アルケイレ) は、2.42 ha.

小土地所有 pequena propriedade 1~25 alq.

中土地所有 média propriedade 26~100 alq.

小土地所有 grande propriedade 100~500 alq.

巨大土地所有 latifúndio 500 alq. 以上

2) Barraclough, Solon: Agrarian Structure in Latin America, 1973, p. 15.

これによれば、family size farms とは、家族の生活を維持するに十分な土地を所有するもの。就業者2~4人程度とある。また、multifamily midium-sized farms とは、家族以外に数名の雇用労働力を雇うほどの経営土地を有するもので、就業者4~12程度。multifamily large-sized farms とは、十分に広い土地を所有し、相当数の常雇い労働力を持ち、その中に労働過程での分業や監理方式に階級制度を持つ。就業者12人以上。いわゆるラティフンディオ latifúndio に相当する。

3) ibid., p. 94.

同資料からの計算によれば、ブラジルにおける minifúndio (subfamily size units) の平均経営面積規模は 2.6 ha., family size farms は 17.2 ha., multifamily midiumsized farms は 113.6 ha., latifúndio (multifamily large-sized farms) は 1,424.8 ha. とする。

〔Ⅳ〕 小生産者集団地「ミネのムラ」形成の諸条件の歴史的分析 —自作農への道—

上記の時期区分にしたがって、各時期における構成員の階層を特徴づける諸条件を「ミネのムラ」構成員の証言を含めて考察していこう。以下の文中の（no. ）で示した番号は構成員の世帯番号である。

この考察には、一般に「近代」海外移住者に見られる「出稼ぎ性」、つまり母村への送金、「錦衣帰郷」の願望といった行動を含めて、日本移民にも一般に見られる経済的階層上昇志向の行動様式を自明のこととして階層上昇の内在的要因として前提に置いていることを断っておこう。この集団内では、調査時点では「錦衣帰郷」の願望が実現した事例はないが、日本の家族への、また日本国への送金は、条件が整った場合には、しばしば行われているからである。したがって、ここでは、階層上昇を可能にした外在的条件の析出に焦点が置かれる。

(1) 初期日本移民期（①の時期1913～24年）

まず、この時期の日本移民の移住動向を年表風に記しておこう。

1908年，第1回移民，笠戸丸，皇国殖民会社（水野竜）扱い。

1910年，第2回移民，旅順丸，皇国殖民が権利委譲した竹村殖民商館扱い第1回。

1912年，巖島丸，第2回竹村殖民商館扱い。

同年，神奈川丸，吉佐移民会社の後身である東洋移民合資会社扱い第1回。

1913年03月，第二雲海丸第3回竹村殖民商館扱い。（1913～19年沖繩移民禁止）

05月，若狭丸，第2回東洋移民合資会社扱い。

08月，帝国丸，第4回竹村殖民商館扱い。

？ 若狭丸，第3回東洋移民合資会社扱い。

1914年05月，帝国丸，第3回竹村殖民商館扱い。

05月，若狭丸，第5回東洋移民合資会社扱い。

1914年08月，第二次世界大戦勃発，欧州移民減少。サンパウロ州政府は日本移民補助金下付を中止し，移民事業は退潮した。この頃は，後に述べる青柳郁太郎のイグアッペ植民地（レジストロ植民地）の開設のみとなる。竹村殖民商館主は権利を元皇国殖民会社社主水野竜に譲渡し，水野は南米植民株式会社を

創設した。

1916年、南米、東洋、森岡移民合資会社が合流し、「ブラジル移民組合」を創設し、代表神谷忠雄は、サンパウロの移民会社アンツーネス社を介して日本移民誘致を州政府に承認させ、州政府補助金を復活させた。

1917年から日本移民送達は順調に増大し、森岡移民合資会社を買収、合併して移民事業専門の「海外興業株式会社」が創設された。1919年、さらに他の移民会社をも合併し、海外興業株式会社は国策移民会社の性格を強く持つようになった。

1918年11月、第一次世界大戦終結。1920年頃からヨーロッパ移民が増大し、日本移民に対する補助金下付が止まる。

1921年、日本内務省社会局が移殖民奨励事業を開始し、海外興業株式会社に移殖民宣伝補助金を交付する。

1923年、関東大震災救済移民補助金交付。(200円／1名)

1924年、大阪毎日新聞、皇太子御成婚記念で移民に船賃補助。(200円／1名)

1924年、日本政府「ブラジル行移民船賃全額補助」予算を計上。全面奨励開始。

この時期の移住者は、一般に「コロノ移民」といわれ、コロノとしてコーヒー農場の労働に従事する契約移住者である。ただし、移民会社の募集に応募して集まってきた私費渡航者であった。第1回移民を推進した皇国殖民会社は、移民を送り出すに当って、当時の外務省に、移民送り出しの保証金を納入させられた。その上で、利益金を獲得することは、企業としては当然の行為である。

1924年以前に着伯した5名のうち、(no. 12)と(no. 14)は、1913年に、第3回東洋移民会社扱いの移民として若狭丸で渡ってきた。渡航費は一人100円ということで、一家族3人で300円の渡航費を支払っている。1918年渡航の他の3名も、サンパウロ州政府の補助制度の下とはいえ、やはり、私費渡航者である。したがって、如何にしてできるだけ短期間に渡航費を償却し、金を稼ぎ出すかが大目的であったことも当然のことといえる。

かれらの入植先は、当時のコーヒー生産の中心であったモジアナ地方であった。(no. 12)は、モジアナ地方のレペイランプレット近くのバルボザ Barbosa 農場に入り、2年契約のコロノとなった。3年目からは、同農場の農場主が所有していた北パラナのコーヒー農場のコロノとなり、4～8年もののコーヒーの木の監理をし、4年目からは、4年契約のコロノコントラチスタとなった。北パラナでは、新開地であるために監理費が高く、またコロノコントラチスタ

の場合は勿論のこと、コロノの場合でもフェイジョン豆やトウモロコシの間作が許可され、それから得られた収入が大きかったという。8年目の1921年には、北パラナで12アルケイレの土地を入手することができた。

(no. 14) は、1913年の渡航時、父母は、初めモジアナ地方の農場に入った。現在、父が死亡しているため、農場名は明らかでない。息子である現在の世帯主は、1922年にアララクアレンセ地方のポアエスペランサドスールで出生している。その後も、幼少の際の記憶であるから明確ではないが、父母はアララクアレンセ地方で、コーヒーのメイエイロをして移動を重ねた。カタンズーバ Catanduba, イタジヨビといった地名を記憶しているという。ささやかな金を貯めて、土地を購入することができたのは、1929年になってからであり、それも、後に述べる日本人星名謙一郎が、アルタソカバーナのアルヴァレスマジャードに開設したブレジョンの第2植民地内であり、広さ4アルケイレであった。

(no. 27) (no. 33) (no. 18) の3例は、1918年の渡航であるから、日本移民の一時的退潮期後、第一次世界大戦期の欧州移民の不足期の移住者である。

(no. 27) はコロノ移住であり、入植先は、モジアナ地方であり、それ以前の移住者と変らない。モジアナ線沿いのクラビーニョ Crabinho のフローレス農場 das Flores に入り、その農場の監督が、先に移住した日本人(広島県人)であり、1年契約のコロノを6農年勤めた。1923年に農場をvari, アララクアラ線のカンブイでコロノを1年勤め、その後、ウパローバの農場でコロノコントラチスタとなり、6農年契約を2度勤めた。その間、弟(no. 5)を呼び寄せる。兄弟3人で1万2千本のコーヒーの木を監理したが、6農年の終りに恐慌に出会い、本人は運送業に転職したが、これも不景気で失敗し、兄弟共々、資本の掛らない借地農になった。

(no. 33) の父もコロノ移住である。ただし、今まで者と異なるのは、入植先がセントラル地方のジュンジャイの近くの農園であるということであった。しかし、ここも旧コーヒー地域であるという点ではモジアナ地方と変らないといえる。コロノは、翌年の2月まで、1農年の義務を終えて、すぐにパウリスタ地方のサンマルチン農場 Faz. São Martin にvari, さらに、その年のうちにノロエステ地方のカフェランジアのモンテアズール農場 Faz. Monte Azul に変った。ここでコロノ生活を6年間過ごし、1924年にはカフェランジアの近くのトバジ Tobaji に原始林24アルケイレを購入し、その土地を自ら開墾して、コーヒー農場を造成した。かれの場合には、入植初期において、良い

条件を求めて、農場を移動したことが、プラスの要因となった。土地購入の前に、故郷の家族への送金も十分にできたという。

(no. 18)の父もコロノ移住である。入植先は、セントラル地方のピラシカーバに近いアルテミス Artemis のブラジル人(元農務長官)の農場であり、契約は定額請負いのコロノとは違って、出来高によるバルセイロ(歩合農)であった。この地方の農場はモジアナ地方よりも開発が古く、生産力も落ちていたうえ、農場主が中央政権を指向していて、農場経営に力を入れていなかったため、労働契約も、生産者の自主性を要求するバルセリアの形態を採ったものであろう。2年目には、普通成木のコーヒー農場には許されない綿の借地1アルケイレが許され、105アローバ/アルケイレ、17ミルレイス/アローバの別途収入を得て、2コント(2,000ミルレイス)を持って、アルタソロカパーナに移動し、アルヴァレスマシャードに近いモンテアルヴァンで5アルケイレ(初めの借地料は120ミルレイス/アルケイレ)の借地をし、綿の外、米、ジャガイモなど国内市場向けの食料生産を始めた。これが当って、3年後の1923年には、モンテアルヴァンに原始林12アルケイレ(700ミルレイス/アルケイレ)を購入することができた。翌年には、さらに2アルケイレを買い足した。1924年にはコーヒーの植え付けを始め、最終的には、1万8千本のコーヒーの木を造成した。

この時期の入植者に共通している点は、家族移住であること、入植先は、当時「日本移民のコロノ学校」と移民会社が宣伝したモジアナ地方のリベイランプレットの周辺であったこと、入植者はここでコーヒー生産の技術を習得したこと、入植者個人の資質、家族構成(労働力構成)、入植地の労働条件に幾分の差異が見られ、それが、かれらの進路に幾分の変更を加えてはいるものの、全体としては、移動してより良い条件を捉えることによって、1924年頃までに小土地所有者になっていること、そして、土地所有者になることによってコーヒー農場主への道を目指していたことなどである。

(2) 国策移民の開始から世界恐慌まで(②の時期1924~29年)

この時期は、既に述べたように、日本の移民政策が国策移民的色彩を強めた時期である。この時期に、日本移民には二つの流れが読み取れる。

一つは、これまでの日本移民が個々の努力から農場を変えてコロノからの脱却を図ろうとしている中で、指導的立場をとった一部の人達が、日本移民が土地を入手して独立する機会を準備しようとした動きである。

1915年頃、初期移民のコロノ入植農場であったガタバラ農場の総監督平野運平が、ノロエステ線プレジデントペーナ *Presidente Pena* の奥のトレスパラスに1,200アルケイレの土地を購入、平野植民地を開設し、100ミルレイス／アルケイレで日本移民を誘致した。

1912年、英伯共営の「サンパウロ土地材木会社」がノロエステ線のビリグイにビリグイ植民地(6,000アルケイレ)を開設したが、1916年より佐賀県人宮崎が書記部長として勤務するようになって、アララクアレンセ地方のノヴァエウローパに入植していた佐賀県人を大挙誘致するなど、日本移民に独立生産者となる機会を提供し、この地域は日本移民の大集団地となった。

1918年、パウリスタ延長線ドアルチーナ *Duartina* の近くに馬田をパイオニアとして形成された福岡移民の集団地福寿植民地や、1918年、同じパウリスタ延長線のガルサ *Garça* に近いガルサ(白鷺)植民地も、規模は小さいが、性格的には共通のものを持っている。

ソロカバーナ地方では、ハワイ、北アメリカを経てブラジルに渡航してきた星名謙一郎が、1915年、アルヴァレスマシャードに北海道から一族共々移住してきた小笠原尚衛と図ってブレジョン植民地(1,500アルケイレ)を購入し、入植地を開設した。土地価格は、当時まだ鉄道も開通していない未開の土地ではあったが、アルケイレ当り30ミルレイスで購入したものを60ミルで販売したので、当時まだ貧しかった日本移民に「土地が安く買える」という希望を抱かせたものであった。星名は、1917年にさらに奥地のサントアナスタシオにバイベン(梅弁)植民地を開設した。これらの植民地経営は決して順調ではなかったし、星名は、1926年に奇禍に遭って死亡したが、入植者には上昇の機会を与えるものとなり、この地域はコーヒーと綿花の生産地として、ソロカバーナ最大の日系人の大集団地となった。

(no. 12)が、1921年に北パラナのカンバラの近くに土地を購入したのも、日本人20家族で200アルケイレの土地を購入してヴィラジャポネザ農場 *Faz. Vila Japonésa* (日本村農場)を創設するためであった。この集団入植地は、不幸にもマラリアと黄熱病の発生で崩壊したが、このような試みは、規模の小さいものまで含めると相当数が数えられる。

このような流れと異なる流れは、日本に直結していたものである。

香山六郎『移民四十年史』によれば「当時、移民会社や聖市の日本総領事館のお歴れき方は、ノロエステやソロカバーナ線のコロノ上りの自由開拓者をさして、転々股旅者の植民者、又は野武士供の寄合植民者と呼んでいた。」とい

う。

その始まりは、イグアッペ植民地 *Colônia Iguape* の創設であろう。1911年、青柳都太郎が密かに日本の政府筋による「東京シンジケート」とサンパウロ州政府との間に州内海岸地域のイグアッペ地方の官有地の払下げ特許を受けた。「東京シンジケート」は、当時の日本の政界の要人によって構成されていた。これが「ブラジル拓殖会社」に組織を変え、1913年に州政府から移住地開設の許可を受ける。これが後のイグアッペ植民地の開設につながる。イグアッペ植民地とは、レジストロ、桂、セッチバーラスの3植民地の総称で、総面積3,025アルケイレ、レジストロと桂はブラジル拓殖会社により、セッチバーラスは、1919年にブラジル拓殖会社を合併した海外興業株式会社によって開設された。「桂植民地」の名は桂太郎陸軍大将が「東京シンジケート」の一員であったことによる。このことに見られるように、個々の植民者の意識を別にして、植民地そのものは国策植民地の色彩が強い。海外興業株式会社は、1918年、パウリスタ本線コレゴリコ *Córrego Rico* に既成の農場を購入してアニューマス・コーヒー農場(600アルケイレ)の経営をも始めた。香山のいう「移民会社」とは、この立場の人々をいう。

イグアッペ植民地に入植した人々の中で、このような植民方法に疑問を抱いた中堅インテリ層の人々がいた。かれらは、日本の信濃海外協会と力行会会長永田との協力で、1924年ノロエステ線ルッサンピーラに2,300アルケイレの土地を購入し、「信濃移住地」を開設し、入植した。ここは、長野県民の集団地となった。1926年、鳥取海外協会がその隣接地に1,200アルケイレの土地を購入し「鳥取県民植民地」を開設し、さらに、1927年には富山海外協会が「富山県民植民地」を開設した。その隣接地に、1926年に熊本海外協会が開設した「熊本移住地」を含め、これら4県移住地を合せて「アリアンサ移住地」*Colônia Aliança* (連合植民地)と呼ばれるようになった。

1922年、日本実業団がイグアッペ植民地を見学し、その結果「南米企業組合」の名で北パラナのピリキートに植民地(1万アルケイレ)を購入。これは、後にウライ *Urai* 植民地となった。

日本の財界の活動としては、1926年、北パラナのバンデイランテ *Bandeirante* に野村合名会社海外事業部が1,350アルケイレの土地を購入し、「野村農場」を開設したことと、1927年にパウリスタ線カンピーナスに三菱系資本のカーザ東山が「東山農場」*Faz. Monte d'Este* を開設したことが代表的な例であろう。

規模の小さいものとしては、1931年、京都の資本家後宮武雄が北パラナのコレネリオプロコピオに300アルケイレの土地を購入し、農場を開いている。

それまでの移植民業務は、日本外務省の管轄下にあったが、1921年「海外興業株式会社」に移植民宣伝補助金を交付するようになってから、内務省が移民会社への監督権を行使するようになり、その結果、1929年に拓務省が設置された。その動きの中で、1927年に日本の各県に各県海外協会を母体に各県海外移住組合が設立され、その連合体として海外移住組合連合会が組織された。そして、これらは拓務省の管轄下に置かれた。

このような背景の下で、1929年、「ブラジル拓植組合」が正式に海外移住組合連合会の現地機関として設立された。1928年、ブラジル拓植組合はパウリスタ延長線のモンテアレグレにバストス移住地(12,932アルケイレ)を購入し、翌年から入植を開始し、また、1929年、ノロエステのペレイラバレットに土地を購入し、入植地(12,500アルケイレ)を開設した。これは「チエテ移住地」と呼称された。さらに、1928年、ブラジル拓植組合は北パラナのトレスバラスにも土地を購入し、アサイ Asahi 移住地(現 Açai)を開設している。

上記の分類によれば、「ミネのムラ」の構成員は、「転々股旅者の植民者」に属するわけであるが、日本の植民政策の大きな波と増大する新しい日本移民と無関係でいられるわけではない。

②の時期(1925年～29年)には、それまでの移住者のうち、(no. 33)は、ノロエステ地方のカフェランジアに24アルケイレの土地を入手し、3万5千本のコーヒー農場を造成し、(no. 18)は12アルケイレの土地を入手し、1万8千本のコーヒー農場を造成した。かれらは、初めはブラジル人労働者を雇用していたが、後には後続の日本人の増加から日本人家族をコロノとして雇用するようになった。

1925年から29年までの間にブラジルに渡航してきたものは8名である。

その中のうち、(no. 05)は独身で、兄の呼び寄せであり、兄と共にコントラチスタとなった。(no. 40)は、ソロカバーナ線のマッシュャードに直接进入り、綿の借地農1年で、そこに土地を購入している。マッシュャードの土地は、前記の星野が開設したプレジョン植民地である。(no. 34)は、独身で、同じソロカバーナ線のランシャリアで土地を入手した親戚の呼び寄せで渡航し、コーヒーと米の混合経営の手伝いのような労働者となったが、病気になって、その後苦勞することになった。

これらの現象は、先に入って、土地を取得した日本人植民者が日本人を雇用

したとの裏返しの現象である。

したがって、この時期にコロノとして移住してきた者は、5家族である。

(no. 23) [後に弟が (no. 15) として独立する] は、1925年に家族と共に渡航し、旧コーヒー世帯であるサンパウロゴヤス線のファゼンダ・グアラニーにコロノとして入植した。このファゼンダはブラジル人の所有するコーヒー・ファゼンダであった。1年契約のコロノを3年勤め終えたところで、父が死亡した。その後、兄弟で同地域のトルコ人が所有するファゼンダ・サンジョアンで2年、パウリスタ線のブラジル人が所有するファゼンダ・モンテアズールで2年、同じくパウリスタ線のオリンピアのブラジル人が所有するファゼンダ・アルトアレグレに2年、各々、コーヒー・コロノを勤めた。日本人の集団地とは無関係なファゼンダでの生活が続いたが、最後のモンテアレグレ農場で1931年のコーヒーの暴落に遭い、遂に知人を頼って、1933年にプルデンテに来てK氏の農場(15アルケイレ)に入り、そこでコーヒーの木6,000本のメイエイロを勤める。K氏はプルデンテの先覚的移住者であった。コーヒーの価格の暴落でコーヒーの価値はなく、成木の農場であったにもかかわらず間作が許可されたので、そこでフェイジョン豆やトウモロコシを栽培した。翌年の1934年にはコーヒーが霜にやられたが、その年からは綿花の価格が良くなり、コーヒーの木の間にワタを植えた。1936年から2年から年間、ポルトガル人の農場で2アルケイレの土地を借地し、ワタの栽培を始め、その結果、1アルケイレ当り2.5コントの収益を得た。その金で、1937年に売出したファゼンダ・マンダグアリの土地2アルケイレを、3コント/アルケイレで購入することができた。

弟の (no. 15) は、兄の (no. 23) が土地を取得した時に独立し、その後、プルデンテの氏の農場でコーヒーのメイエイロを1年間、他の日本人の農場でカマラダを1年間、1938年からは、綿作に転じてアニューマスで借地農を2年間、インジアナで借地農を3年間、エスピゴンでメイエイロを2年間勤め、1949年になって「ミネのムラ」に4アルケイレの土地を購入することができた。その間の農場はすべてプルデンテ近傍のもので、農場の主人はすべて先住の日本人であった。かれは、この間に、その中の一人の農場主の娘と結婚した。

(no. 19) は、1929年に家族と共に渡航し、(no. 23) と同じくサンパウロゴヤス線のファゼンダ・モンテアレグレにコロノとして入植した。この農場は約36万本のコーヒーの木を持つファゼンダで、コーヒーの木は、およそ20年のものであったから1910年前後に造成されたものである。1年契約で、1,000本当りの木の監理で300ミルレイス、労働力3人で13,000本の監理を請負い、0.5ア

ルケイレ（約1.2 ha）の余作地を借受けた。コーヒーの木がまだ若かったので、価格の低落には耐えていたが、1931年の大暴落で維持困難となり、コーヒーの実を焼く景色を見ながら、前記の知人のK氏を頼って、ブルデンテに来て、日本人のシチアンテM氏の農場で借地を始めた。1934年にブルデンテ郊外のモンテアルヴァンにコーヒーの木1万2千本付きの土地15アルケイレの土地を総計20コントで購入し、そこで専ら綿作に従事した。ここで家族と別れて独立し、1937年のファゼンダ・マンダグアリの土地の売出しの機会に、新たに現在の「ミネのムラ」の土地3アルケイレを購入した。

(no. 21) は、1929年に渡航し、アララクアラに近いウパローバのイギリス人の農場ファゼンダ・カンブイにコロノコントラチスタとして入植したが、コーヒーの暴落に遭い、契約期間終了前に他に転じた。その後、パウリスタ地方でワタの借地農を2年やってから、同地方のイタリア人の砂糖きび農場に入り、兄弟で6アルケイレの砂糖きびの請負い生産に従事した。一向にうだつが上らないまま、1947年に弟はサンパウロ市近郊の野菜作りに向い、本人はパウリスタ地方のサンカルロスでアルケイレの借地をして零細な野菜作りを始めた。1951年に「ミネのムラ」に来たが、1960年現在でも依然として土地を購入することができず、アメントイン（落花生）の歩合作に従事している。

(no. 25) は、1929年に家族と共に渡航し、パウリスタ線ピラチニンガに1年契約のコーヒー・コロノとしてブラジル人の所有するヴィアード農場に入植した。翌年、ソロカパーナ地方に転じ、マルチノポリスの知人の農場で4年契約のコーヒー・コントラチスタとなった。この時にコーヒー価格の暴落に遭ったが、間作のフェイジョン豆とトウモロコシが良く、これを勤め上げた後、他の日本人の農場で2年間のコロノとなる。ここでもフェイジョン豆が良く、1935年に、ブルデンテ市の南のアンニューマスに霜で駄目になったコーヒー耕地15アルケイレを購入した。その後は、この耕地で12年間、ワタを作り続けた。

(no. 36) は、1929年に家族で渡航し、アララクアラ線のサンタエルネスチナにあったブラジル人のコーヒー・ファゼンダに4年契約のコロノとして入植した。コーヒーの不況でファゼンダは倒産したが、監督がコロノの賃金を支払ってくれたので1933年までは勤め、その後ソロカパーナ地方に転じた。この間日本人コロノの多くがブラジル拓植組合が開設し、当時の日本人入植者の集団地であったパストスに逃げている。父の病氣という不幸があったが、ソロカパーナ地方のランシャリアでワタの借地農となり、土地を移動しながら1943年までそれを続けた。

これらの事例を見ても、この時期の移住者に共通していることは、1931年のコーヒー価格の暴落に遭遇し、先住移住者の世話になりながら、ワタの好景気に支えられて借地農となり、アレンダタリオから独立農への道を模索した点にあることは明らかである。

(3) 世界恐慌から第二次世界大戦まで (③の時期1928~39年)

(a) コーヒー価格の下落

国際市場向けの商品であるコーヒーは、1929年の恐慌の影響を全面的に受けることとなった。1929年にはニューヨーク価格でポンド当たり22.5セントであったものが1930年には10.0セント、1932年には11セント、1933年には9.4セントにまで下落した。

生産者のレベルで見ると、(no. 33)の証言では、1袋当りの価格は、1928年には60ミルレイス、1929年には50ミルレイス、1930年には28ミルレイスにまでなり、1931年には遂に8ミルレイスにまで急落したという。(no. 25)の証言によれば、1929年には60ミルレイスであったものが、1933年には9ミルレイスにまで下ったというし、(no. 05)の証言によっても1933年には12ミルレイスだったという。農業労働賃金は、その時でもコロノとしての管理費と別の収穫のためだけの賃金が1袋当たり4~5ミルレイスしたというから、この点からもサンパウロ州のコーヒー生産は壊滅的な打撃を受けたことになる。

ちなみに、1930年のコーヒーの国際価格の低落に対して、ブラジル政府は、政府のコーヒー生産から流通に至るまでの統制機関であるブラジル・コーヒー院 I B C を1931年に設立し、それを通じて採ったコーヒーの価格支持政策や1932年のサンパウロ州の作付制限政策は、初めからほとんど破綻していたといえよう。

(b) コーヒー・ファゼンダの解体

1930年代までの「ミネのムラ」周辺部の状況は、公式の記録の欠如で正確なことは知ることができない。しかし多くの人々の証言によると、ソロカバーナ鉄道がブルデンテに到着した1918年には、この地域の土地は、既に少数のファゼンダに分割されていたことは、ほぼ明らかである。

その一つが、ドイツ系のファゼンダ・マンダグアリ Faz. Mandaguari である。他の一つがファゼンダ・カンパメント Faz. Campamento である。

ファゼンダ・マンダグアリは、「ミネのムラ」をほぼ源流として北に流れるマンダグアリ川流域の20キロメートル以上に亘るインジアナまでの広大な土地

を占有していたという。「ミネのムラ」に隣接して現存する鉄道の小駅は、当時のファゼンダのためのものであった。「ミネのムラ」から西に流れるサントアナスタシオ川の流域のうち、分水嶺からピラポジーニョまでの約25キロメートルに亘る土地は、サントス Dr. Agosto Santos が所有するファゼンダ・カンパメントによって占有されていた。これらのファゼンダは、1910年代後半から1920年代初頭に開かれ、恐慌までは、コーヒー・ファゼンダとして発展しようとしていたことは、1960年現在に35~40年ものもののコーヒーの木が残存していたことから明らかである。

しかし、1929年の恐慌を境にして、これらのファゼンダは解体過程に入った。

ファゼンダ・マンダグアリの中、マンダグアリ川の西の部分は、同じドイツ系の土地会社アヴァアサン Companhia de Imóveis Aviação (略称 CIMA) が介在し、1930年代に小口分譲 (いわゆるロテアメント loteamento) された。当時の価格は、マツ (森林) で1.5コント/アルケイレだったという。「ミネのムラ」に関係した所では、1937年 (第1区) と1941年 (第2区) に、土地が分割販売された。さらにいえば1957年には第3区に分譲が行なわれた。この年には、ファゼンダ・カンパメントを分割したファゼンダ・モンテアルトの分譲も行なわれている。

(c) 綿花生産の興隆

1929年恐慌では、綿も大きい影響を受けた。しかし、ブラジルの綿花に関してみれば、恐慌後も綿花の国際市場は比較的早く好転し、価格の回復も早かった。綿花のポンド当りサンパウロ価格 (タイプ5) は、1929年には15.5セントであったものが、一時10.0セントにまで下ったが、1932年には、14.3セントにまで回復した。それまでのブラジルの綿花は、専らイギリスに輸出されていたが、イギリスはブロック経済化をはかり、インド綿をイギリス以外の諸国に対して閉め出したため、インド綿の入手が困難になったドイツおよび日本が、ブラジル綿の買付に入り、さらにヨーロッパ各国がブラジル綿の買付に参加したためである。

このような国際市場の変化に対応して、州政府が品種の改良と統一と農業金融制度の整備に力を入れたことも、大きな理由となる。

1920年代までは、ブラジルの綿花は短繊維のものが多く、また品種が統一されていなかった。1921年と1924年の2度の国際綿花会議の調査の結果、ブラジル綿の有望さが認められるとともに品種の不揃いが指摘され、1926年からサンパウロ州農務局の指導の下に、カンピーナス農事試験所で改良種の作成が行わ

れるようになった。国際綿花市場が好転を始めた1932年からサンパウロ州の綿花栽培者に対しては、州農務局指定以外の種子の播付けが禁止され、さらに生産品を州取引所内で鑑別し、製品の格付けをして品質の改善と統一を図った。これは国際綿花市場の好転に照応するものであった。

この時期の農業金融は、後に述べるように、初めは商業資本や農産物加工資本に負っていたが、1937年にブラジル銀行内に農工信用局 *Carteira de Crédito Agrícola e Indústria* (CREAI) が設立された。これは、専らコーヒー生産者のためのものであったが、綿花栽培者にも適用され、系統資金の貸与を通じて品種の統一も行なわれるようになった。

このような国際綿花市場の好転の中で、この時期に、ブラジルには多くの国際的綿花加工資本の進出が見られた。これは、ブラードが指摘していることである。かれは、ドイツや日本の綿花買付に触れながら、「しかし、このチュートンと日本の進出は、他の帝国主義者のグループを排除はしなかった。帝国主義者は、ブラジルの綿花生産に刺激を与え、それから利益を吸い取ろうとしていた。それは北アメリカのことである。それらは、直接に生産に携わらなかったが、生産と準備と始末（脱殻と包装）や金融と商業面で並行して爪を研いでいた。それについての公けの資料はないが、しかし、誰もが、北アメリカの大資本であるアンダーソンクレイトンやマックファーデンやその他の会社がブラジルの綿の生産の大部分を統制していたことについて無知ではない」と述べている。(Prado Junior, Caio: op. cit., pp. 281-282)

ソロカバーナ地方に関係する限りで見ると、1934年、アメリカ系のアンダーソンクレイトン *Anderson Clayton Cia. Ltda. (ACCO)* がプレジデンテプルデンテに繰綿工場を建設したのを始め、次のような諸会社が、その地方に進出した。

アメリカ系 農産加工資本のスィフト社 *Swift* 系のマックファーデン *Mac Fadden*

アメリカ系のサンブラ社 *Sociedade Agro-Indústria Brasileira (SAN BRA)*

アメリカ系のサージドブラジル社 *Cia. Saad do Brasil*

イタリア系ブラジル資本のマタラーゾ社 *Cia. Matarazzo*

ブラジル系のエステーヴェ兄弟会社 *Máquina Esteves Irmãos*

日本の住友系のブラスコット社 *Cia. Brascotto*

東洋綿花会社系の南部綿花会社

伊藤忠商事株式会社

日系のプラスコット社は日本人植民者の多いソロカバーナ線のアルヴァレスマッシュード、パウリスタ線のマリリア、ノロエステ線のピリグイに繰綿工場を新設し、1937年から綿花の買付を開始した。また、南部綿花会社や伊藤忠商事株式会社は買付に参加はしたが、前者は、繰綿工場の賃借契約という形によるものであり、後者は、アンダーソンクレイトン社との協定買付という形をとったものである。

(d) 綿花の生産と流通機構

恐慌によるコーヒー価格の暴落に遭遇した地主は、それまで許可していなかったコーヒー畑内での間作の作物に綿を加え、また、農場内でコーヒー生産に役立っていなかった斜面の低い部分や牧場地、未利用のマットを借地農に貸し与えた。同じように恐慌のあおりを受けた資金に乏しいコロノなどの移民労働者は、少額の資金でも支払いうる借地料を支払い、場合によっては、それによって一攫千金の機会の実現を期待できた。

アルタソロカバーナでは、12月から2月にかけてが気温が高く雨期に当る。ワタの栽培にあたっては、一般に9月に耕起して10月から11月に播種する。生育期間中は雨が多く、日射が強い。雨期は3月に明け、この頃から収穫（綿摘み）が始まる。綿摘みは1番手から3番手までであり、6月頃まで続く。マット（森林）を伐採して焼いた新しい土地では、順調ならば無肥料で1アルケイル当たり400アローバ arroba 以上（1アローバは約15キログラム）の生産が得られた。しかし連作を続けていくと地力は低下し、数年で200アローバ以下に下る。地力の低下に伴って病虫害も発生しやすくなる。それらに対して肥料を施したり防虫・防除のために農薬を使用すると、当然生産費が高騰する。したがって、生産者は、綿作に対する処女地がある限り、数年たつと土地を替えて移動するほうが有利となる。

このような条件に支えられた綿花生産は、借地形態を採りやすいのは当然といえる。借地農という形態を採る限り、生産者は、有利な土地を求めて、移動を重ねやすく、周辺の新開地や内陸の処女地は、綿作の好個の土地であった。これまでコーヒー生産地として開発が進まなかったソロカバーナ地方が綿作地として急速に脚光を浴びたのは、このような理由からといえよう。

綿花を集荷する商業・加工資本は、このように移動性の大きい綿花生産者を捉えて、綿花を集荷する必要があった。

1930年代に、競ってソロカバーナ地方に進出した綿花会社は、資金に乏しい

生産者の生産を刺激するため、また集荷を容易にするため資金の貸付けを行なった。まず会社は各生産地に生産物集荷の代理人を立てた。会社は、この代理人を通して生産者と直接売却り前契約という形で売買契約を交した。会社は少な目に立てた見込収穫の20パーセントほどの資金を前貸金として生産者に貸付ける。生産者が約束の生産物を会社に納めると、中に立った代理人は、売買金額の5～10パーセントのコミッションを得た。もし、生産者が、約束を破ってより条件の良い他に転売した時は、前貸金は返却しなければならない。その際には、前貸金に対して月10パーセントの利子が加えられた。このような転売罰則が厳しかったということは、裏を返して見れば、ワタの好景気を証拠づけるものである。この状況は、ワタの好景気が続いた1939頃まで、すなわち、第二次世界大戦の勃発前まで続いた。

(e) 小さな結び

「ミネのムラ」構成員は、このような状況の下では、当然のことながら、大部分がワタのアレンダタリオまたはメイエイロになった。そして、有利な条件を求めて移動を重ねることになった。他方、シチアンテも増加した。小商人の出現もこの時期の特徴となった。ここでは、個々の事例を述べることを止めて、第7表を作成した。この表は、1929年以降を採って、農業者と非農業者別に大別し、さらに、農業者を作物別と、土地所有者と非土地所有者別に大別したものである。(第7表)

1929～39年で見ると、1929年の恐慌時には、1例を除いて、シチアンテまたはコロノの形でコーヒー生産に関わっていたし、それ以後の渡航、入植者も2例を除いて、コーヒー生産に関わっていたことが解る。1932年のコーヒー価格の暴落は決定的であった。1940年に時点で、「ミネのムラ」の構成員31家族中、商業に転じた者2名を別にすれば、コロノおよびコロノコントラチスタを含めて、コーヒー生産に関わる者は皆無となり、その中で砂糖きび栽培に転じた者1名を除くと、残の28名は、すべてワタ栽培に従事している。13家族がアレンダタリオ(借地農)であり、小農地を所有したシチアンテが11家族となった。

この段階で、小農地を所有した農業者が、アレンダタリオより優位にあるとは即断できない。土地を購入することができるということは、たしかに、資金的余裕を持っていることではあるが、土地所有者であっても、地力取替的な無肥料栽培に基礎を置いている限り、数年おきには新しい土地を入手するために移動しなければならないからである。アレンダタリオの場合は、その点自由に有利な土地を選定することができ、場合によっては、高収穫を得て高収益を手

に入れる可能性を持っていた。

(4) 第二次世界大戦期（④の時期1939～45年）

(a) この時期の全般的状況

この時期の全般的特性は、まず第二次世界大戦の開始によって、国際綿花市場は悪化したことである。第二次世界大戦の勃発により、ドイツに次いで日本がそれまでの国際綿花市場から抜け出し、綿花は相対的に過剰生産に落ち込んだからである。さらに一定の土地でのワタの連作は地力の減退を招き、施肥、防虫、防除などを必要とするようになって、それが生産費の高騰を招いた。そのことによって、綿花生産は、停滞期に入る。

それと同時に、ブラジルは、第二次世界大戦による先進工業国からの工業製品の輸入が途絶え、その結果、ブラジル国内の輸入代替工業が成長し始め、国内の綿工業の発展は、それなりに綿花市場を安定させ、都市人口の増大が国内食料市場を拡大した。さらに、ブラジルは大戦中の連合国側の後方食糧基地となった。これらの結果、国内市場、海外市場向けの食糧生産が刺激され、そのことによって、生産者の中に、これらの市場向けの食料品生産に転換する者が現われた。

日本人農業者に限って見れば、とりあえずの帰国の困難が予想され、その結果、農業生産が地に着いたものとならざるをえなかった。国内市場向けの食料品生産は、綿花栽培と異って、土地の荒廃を防ぎ、なおかつ土地の高度利用を実現できるものを含んでいた。しかし、大勢は、まだ一攫千金を期待する状況にあったので、戦時という特殊状況の中で特に市場性を高めた一部の作物に走った者もあった。それはハッカ（オルテラン hortelã）と養蚕であった。

(b) ハッカと養蚕のブーム

ハッカは、1940年には結晶で1キログラム当り7ミルreisにも達しなかったが、戦時中の品不足で1941年には1キログラム当り100ミルreisを超え、1942年には250～400ミルreisを推移するまでになった。しかし、投機的性格が強く、栽培に当っては土地を荒廃させやすい。その上、蒸留加工の設備を必要とする。この時期に「ミネのムラ」の構成員の中にも5家族のハッカ栽培者が現れたが、そのうち4家族が土地所有者であった。しかし、戦争の帰趨がはっきりしだした1944年には大暴落し、短いブームは去った。養蚕も日米開戦による品不足が契機である。特に、ブラジルでは戦時中のパラシュートの原料として喧伝された。前出の『移民四十年史』によれば、当時「奥地の日本人ハッ

カ栽培者および養蚕者に対して『ブラジル生産のハッカや絹糸は米国へ輸出されて、米軍の軍需品生産材料に供せられるのだ。ハッカ生産者、養蚕者は、間接に国賊行為となる』との説が流布され論議され、また「直接生産者に対して威嚇行為があった」と記している。「ミネのムラ」の構成員の中にも1家族が養蚕に従事しているが、これらは、結局一時のブームで終わった。

この時期に、幾分の資金を得て新しく小商店を開き綿花のなど農産物の代理仲買を兼業しながら商業に進出した者が現れたが、その点は、次節に譲る。

(5) 第二次世界大戦後（⑥の時期1945年以降）

(a) 自作農化へ（シチアンテの収斂）

日本人農業者に限っていえば、日本の降伏による第二次世界大戦の終結は、「勝負組」問題があったとしても、日本の状況が分るにしたがって、帰国の困難さを明らかにした。日系社会として日本への救援物資をおくるという行為にもはっきりと現れている。二世の成長も大きい要因となって、ブラジル社会への定着が意識されるようになった。あらためて子弟の教育問題（日本語問題でもある）が意識されるようになった。農業生産面では、ただひたすらに金を儲けようとして、有利な条件を求めて移動しながらでも借地を続けていく「一攫千金」型の農業経営からの脱却が始まった。この時期の大きな特徴は、何といても自作農への志向である。

それまでのワタなどに見られる単作一本やりの農業経営から、土地の有効利用を考慮した経営方式が徐々に定着しだした。それは、ワタ+アメンドイン（落花生）、バタータ（馬鈴薯）+アメンドインという複合経営の方式である。

1956年のプルデンテ郡の統計を見ても、農産物の上位3品目は、ワタ、アメンドイン、バタータによって占められている。

アルタソロカバーナ地方でバタータの栽培が始まったのは、1919年にプルデンテ市の郊外のポアヴィスタ Boa Vista でのことであった。しかし、この栽培が一般化するのには1929年の恐慌以降のことであった。生産者の証言によっても、バタータがサンパウロ送りになるのは、つまりサンパウロ市場に結びつくのは1935年頃のことであったという。

ブラジルの都市住民の常食の一つとして商品価値を持つバタータは、もともと都市近郊の生産物であった。サンパウロ州では、専らサンパウロ市近郊で生産されていたが、そこでの収穫期は11月、12月を中心としていたのに対し、アルタソロカバーナでは7・8月が収穫期であった。運輸機関の整備からサンバ

ウロ市送りが可能になると、この収穫期の差が有利に働いた。もともと生鮮食料であるから、大量に生産すれば、価格の変動が激しく、投機的性格を持っている。灌漑設備を完備して年間栽培を可能にすることによって、規模拡大を図ることも可能である。(その事例については西川大二郎、前出、1968年参照)

ここでは第二次世界大戦の勃発でワタの国際市場が悪化した1939年頃から、ワタからパタータ栽培に転換する者が多くなって、特に生産が増大した。それも、同時期にワタからの転換作物となったアmendイン(綿花油に代る食用油の原料となる)と複合させることによって経営を安定させた。

パタータの栽培期には、2・3月(播種)～6・7月(収穫)のセッカと7・8月(播種)～11・12月(収穫)のアグアとがある。収穫の主体はセッカのイモである。アmendインの栽培期には、1・2月(播種)～7月(収穫)のセッカと8・9月(播種)～1月(収穫)のアグアとがある。パタータは、初めパタータ・セッカ+トモロコシという組合せであったが、後にパタータ・セッカ+アmendイン・アグアまたはアmendイン・セッカ+パタータ・アグアとなった。パタータは、もともと大量の肥料を必要とする作物であり、これと組合せることによって、アmendインの生産が向上した。

第8表は、「ミネのムラ」構成員が「ミネのムラ」に定着した年別傾向を示

ミネ定着年	世帯数
1937年	3
1938年	3
1939年	3
1940年	2
1941年	3
1942年	0
1943年	0
1944年	1
1945年	3
1946年	2
1947年	3
1948年	4
1949年	2
1950年	1
1951年	3
1952年	1
1953年	2
1954年	1
1956年	0
1956年	2
1957年	0
1958年	0
1959年	1
合計	40

第8表 「ミネのムラ」構成員の「ミネのムラ」定着年別傾向

したものである。(第8表) これを見れば明らかなように、「ミネのムラ」構成員が「ミネのムラ」に定着したのは、1937年以降のことである。そして、約3分の2は1945年以降である。この時期は、この地域のフェセンダが分譲された時期に一致するが、それと同時に、上記の農業経営形態が定着する時期にも見事に一致している。自作農化を志向し、それを実現できた農民にとって、まさに採用可能な好個の経営形態であったわけである。また、この経営形態が、小農的状况を規定する関係を作っているともいえる。

(b) 商業へ進出した一部の農業者の限界。

第二次世界大戦中から戦後にかけては、「ミネのムラ」の構成員の中から商業に転ずる者が現われたことは前々節に述べた。かれらは、小商店を開くとともに、農産物の現地仲買の役割をした。これも既に述べたことであるが、内陸部における綿花生産者を捕捉するために、ここに進出した綿花会社は、各地に代理人を置いた。「ミネのムラ」で商業に転じた者は、まさにこの立場の者であった。

第二次世界大戦の勃発によって、綿花が相対的過剰生産の傾向をもちだすと、綿花の流通機構に変化が起こった。この時期になると、綿花会社は、それまでの一様に直接生産者から綿花を買付けという方法を止め、大口買付と小口買付とに分け、大口買付を優先し、大口買付には相対的に有利な価格での買付けを始めた、小生産者からの直接買付けは、当然のことながら小口買付となる。大口買付が優先されると、それまでの会社の代理人や地主や農業者で幾分の資金を得て商業に進出しようとした者が仲買人に変質し、小口の生産者から綿花を集荷し、大口として綿花会社に販売するようになった。

代理人は消滅し、独立した仲買人が現われた。綿花の買付の機構は、綿花会社→仲買人→生産者という関係になり、買付契約は、綿花会社対仲買人と仲買人对生産者という二重の関係となった。それによって、綿花会社は綿花の集荷機構の系列化を図り、奥地に移動していった生産者を捕捉し、諸経費の削減を図り、綿花を低価格で買付けるとともに、この頃から顕著になってきた病虫害による不作や収穫期における雨による不作に対処した。

契約は、綿花会社対仲買人、仲買人对生産者という二重の関係になったため、契約は次のようにして行われる。仲買人は、初めに綿花会社との間に予想される価格と数量との契約を交し、会社から前貸金を受取る。この価格を基準にして、仲買人は生産者との間に買付価格と数量とを契約し、それにしたがって、綿花会社から貸付けられた資金と自己資金とを生産者に前貸しする。生産者が

生活資金にもこと欠く場合には、日用品や食料品までも前貸しすることがある。

会社と仲買人との間の契約は、破棄することができない。もし、綿花の価格が騰貴して他の会社が有利な価格を提示しても、契約しただけの数量は契約した価格で納付しなければならない。他方、仲買人と生産者との間の契約では、生産者が契約を破ることがある。不作で予定の生産物が提供できないとか、価格が好調で他の仲買人や綿花会社にぬけ売りする場合である。この場合を想定して、契約の際に仲買人は生産者に対して、前貸金に月10パーセントの利子を掛けている。また、日用品や食料品の現物前貸しについては、生産物の買付の際に精算することにして、利子を加え、また危険を見込んで前貸品に市価より高い価格が付けられている。しかし、不作や移動性が大きい小借地農相手では、仲買人はおうおうにしてこの契約を破られ、前貸金の回収が不能となる。このような機構の上では、末端の集荷は、仲買人の責任において行われ、綿花会社は、一定数量の生産物を安定した価格で集荷することができた。また、大きな変動のない限り、仲買人は、それなりの中間利潤を獲得することができた。

1951年には、朝鮮戦争の影響を受け、綿花の価格が高騰し、この地方にワタの買付け競争が起こった。綿花会社は、直接買付けに参入し、直接綿花会社の傘下に属していなかった中小の仲買人は疎外されていった。翌年の1952年は、前年の最高価格が147クルセイロにまでなった経験から、契約は値上りを見込んだ価格で行われたにもかかわらず、価格は80クルセイロにまで下落した。そのため、生産者と仲買人は、大きな痛手を受けることになった。「ミネのムラ」構成員の中で、それまで商業に従事していた (no. 40) と戦後商業に転じてきた (no. 29) および (no. 17) が、1952年に商業から手を引き農業に撤退したのは [(no. 29) の場合は投機的ハッカ栽培に手をだしたことも原因となっているが] 以上のことが構造的原因となっている。

ワタに代って登場したアmendoin (落花生) の生産・流通についても、大加工資本を頂点とする似たような機構が形成された。この場合には、生産者→仲買人→大加工資本という関係と、生産者→仲買人→デスカスカドール→大加工資本という関係とがあり、デスカスカドール *descascador* という乾燥・脱殻を行なう中間加工資本が加わるが、基本的構造は変わらない。(西川大二郎, 前出, 1962年, pp. 30-42参照)

このような関係の中では、小農民の上昇の芽は摘み取られ、小農民は小農民に収斂することになりやすい。このような状況の中で、さらに階層的分解が進行するが、一方では、若年層の都市への流出があり、他方、農業者で留まる限

りは、集約的技術を生かしてサンパウロのような大都市近郊へ転出するか、それを望まないものは、綿花栽培のような粗放的栽培形式を以ってさらに内陸の新開地に規模を拡大して進出するかいずれかになる。

「ミネのムラ」の社会経済的性格の prospects 的分析は、稿を改めることにする。

(本報告を作成するにあたっては、特に生の資料の整理などに1989年度法政大学特別研究助成金を用いた)